

**HYOGO** 令和7年度

# ヒューマンライツ 作品コンテスト 作品集

兵庫県・公益財団法人兵庫県人権啓発協会



## 発刊にあたって

兵庫県では人権尊重の理念に関して県民の理解を深めることにより、人権の尊重が社会の文化として定着し、すべての県民がお互いを認め合いながら共に生きる「共生社会」の実現をめざして、家庭や学校、地域、職場等における人権教育及び啓発・研究を進めてきました。

少子・高齢化やグローバル化、ICT技術の急速な進展などによって、人々の価値観や生き方が多様化する中で、社会状況は大きく変化し、人権課題は、ますます多様化し、複雑化しています。特にインターネットによる人権侵害、職場や学校でのハラスメント・いじめ等に加え、社会的養護を含めたことも人権、外国人や障害のある人、性的マイノリティの人権や性暴力の問題など様々な人権課題が社会的関心を集めています。

兵庫県と（公財）兵庫県人権啓発協会では、日常生活の中で人権の尊重が文化として定着している社会をめざして「人権文化をすすめる県民運動」を市町と共に展開してきました。昨年度からは「H Y O G O ヒューマンライツ作品コンテスト」として文芸部門に加え動画・イラスト作品を公募し、その創作や鑑賞をとおして県民の皆さんに人権について主体的に考え、豊かな人権感覚を身につけていただくことを目的とした事業としています。

今年度は、文芸部門二二八編、動画部門九一作品、イラスト部門は三二作品の応募がありました。いずれも、人の優しさや思いやり、支え合うことのすばらしさ、生命や人権の尊さ・大切さなどが綴られた力作ぞろいでした。

ご応募いただいた作品の中で優秀なものについては、ひょうご人権ジャーナル「きずな」やラジオ番組等の広報媒体、啓発グッズによる人権啓発に活用して参ります。作品づくりをとおして育まれた人権尊重の心が県民の皆さんに広く発信され、人権文化の定着が一層図られることを期待しています。

本作品集には、本年度の応募作品の中から、最優秀賞五作品（文芸部門三、動画部門一、イラスト部門一）、優秀賞八作品（文芸部門六、動画部門一、イラスト部門二）を収録いたしました。県民の皆さんにご覧いただくと共に、人権啓発や研修の場でぜひご活用いただき、日常生活での実践につなげていただくことを願っています。

また、多数の作品について、慎重かつ厳正な審査をしていただきました審査委員の皆さんに、この場を借りて心よりお礼申し上げます。

最後になりましたが、今後とも「H Y O G O ヒューマンライツ作品コンテスト」をはじめ、さまざまな啓発事業などを実施し、県民の皆さまの人権意識の高揚や人権文化の創造に努めて参りたいと存じますので、どうぞよろしく願います。

令和七年十二月

兵 庫 県

公益財団法人兵庫県人権啓発協会

令和七年度 H Y O G O ヒューマンライツ作品コンテスト部門別入賞者

文芸部門

氏 名 作 品 名 区 分

〈創作分野〉

最優秀賞

優秀賞

佳 作

高 柳 美 緒  
山 口 豊  
瀬 尾 寧 来  
野 村 徹  
福 嶋 あきら  
万 年 筆

聞こえる色 感じる音  
白ねこ人形劇団  
左耳  
後会の柿すだれ  
フランスの菊  
生まれてきてくれてありがとう

（一般の部）  
（学齢児童生徒の部）

〈随想分野〉

最優秀賞

優秀賞

佳 作

桃 井 唯 月  
大 城 戸 聡 子

人権とはなんだろう  
家族内の人権について  
「家族の役割」

（一般の部）

原 田 正 樹

優しい世界の創り方

（学齢児童生徒の部）

田 中 幸 典

働く理由

塚 口 佳 子

老いてなお、思いは深く

藤 本 一 輝

車イス

〈詩分野〉

最優秀賞

蔭谷千春

幸せなとき

優秀賞

黒田紀子

シャボン玉のように

石本芽依沙

一人じゃない世界

佳作

原田怜奈

雲外蒼天

くりちゃん

こせいってすてきだね

貴傳名咲良

心の輪

(一般の部)

(学齡児童生徒の部)

動画部門

最優秀賞

チームC (県立伊丹北高等学校)

Hurt Hearts

優秀賞

神戸星城高校放送部 (神戸星城高等学校)

わかってください

佳作

4人組 (神戸学院大学附属高等学校)

気づいてあげよう相手の気持ち

チームF (県立伊丹北高等学校)

十人十色

とり (神戸学院大学附属高等学校)

人種差別への意識

イラスト部門

最優秀賞

柴田結衣 (明石市立野々池中学校)

優しさで明るく

優秀賞

福永柚樂 (クラーク記念国際高等学校三田キャンパス)

みらいを描く

佳作

ぱへぽ

ちがいを力に、輪になろう

神頭幸香 (県立龍野北高等学校)

見て。

阪本夕夏 (育英高等学校)

助け合い世界

# 目次

【総評】	審査委員長 勝沼直子	1
------	------------	---

【文芸部門分野別審査講評】	各審査委員	2
---------------	-------	---

## 【創作分野】

〈最優秀賞〉	聞こえる色 感じる音	高柳美緒	13
--------	------------	------	----

## 〈優秀賞〉

(一般の部)	白ねこ人形劇団	山口 豊	25
--------	---------	------	----

(学齢児童生徒の部)	左耳	瀬尾 寧来	34
------------	----	-------	----

## 【随想分野】

〈最優秀賞〉	人権とはなんだろう	桃井 唯月	45
--------	-----------	-------	----

## 〈優秀賞〉

(一般の部)	家族内の人権について ～家族の役割～	大城戸 聡子	47
--------	--------------------	--------	----

〈学齢児童生徒の部〉	優しい世界の創り方	.....	原田正樹	.....	49
------------	-----------	-------	------	-------	----

## 【詩分野】

〈最優秀賞〉	幸せなとき	.....	蔭谷千春	.....	51
〈優秀賞〉	シャボン玉のように	.....	黒田紀子	.....	53
（一般の部）	一人じゃない世界	.....	石本芽依沙	.....	54
（学齢児童生徒の部）					

## 【動画部門】

〈最優秀賞〉	Hurt Hearts	.....	チームC（県立伊丹北高等学校）	.....	57
〈優秀賞〉	わかってください	.....	神戸星城高校放送部（神戸星城高等学校）	.....	57

## 【イラスト部門】

〈最優秀賞〉	優しさで明るく	.....	柴田結衣（明石市立野々池中学校）	.....	58
〈優秀賞〉	みらいを描く	.....	福永柚樂（クラーク記念国際高等学校三田キャンパス）	.....	58

◆令和七年度 HYOOGOヒューマンライツ作品コンテスト応募状況

分野	文芸部門		
	一般（高校生以上） 学齢児童生徒（中学生以下）		
創作	18	8	10
随想	117	107	10
詩	93	51	42
応募総数	228	166	62

動画部門		
学生	一般	
3		学校数
91	0	作品数
91	0	応募総数

イラスト部門		
学生	一般	
3		学校数
25	7	作品数
25	7	応募総数

◆令和七年度審査委員

- 勝沼 直子（総括）  
時里 二郎（詩）  
古卷 和芳（イラスト）
- 尾崎 美紀（創作）  
山本 剛大（動画）
- 三浦 暁子（随想）  
篠原 嘉一（動画）

## 総評

審査委員長 勝沼 直子

誰でも自由に発信できるSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービスⅡ交流サイト）が、いつの間にか私たちの社会でコミュニケーションの手段として大きな存在感を持つようになりました。

最近、全国的な関心を集めた選挙で、SNSなどで拡散した曖昧な情報や偽・誤情報が結果に影響を及ぼしたとされる状況が生じています。偽・誤情報の中には、誰かをおとしめようとする悪意に満ちたものもありますが、それが正しいと信じこんで、あるいは真偽はよく分からないけれど、知らない人に教えてあげようという「正義感」や「親切心」から拡散されていく場合もあります。そのスピードは事実に基づく情報の何倍も速いと言われています。

匿名性に守られた発信者は、面と向かつては口にできないであろう差別や偏見、心ない誹謗中傷<sup>ひぼう</sup>も、ネット上では許されると勘違いしてしまうのでしょうか。世界中で広がる「自国第一主義」や「排外主義」の台頭は、その思い違いが現実の社会まで浸食しつつあるのではないかという危うさを感じずにはいられません。

こうした情報の濁流に、私たちはどうあらがえばいいのでしょうか。流れに任せて、やり過ごすしかないのでしょうか。

事実がどうであれ、自分が信じたいものを信じるという人と、どうしたら理解しあえるのでしょうか。対話をあきらめるしかないのでしょうか。

令和7年度の「HYOGOヒューマンライツ作品コンテスト」優秀作は、正義が揺れ動く中、自分なりの答えを誠実に追い求めようとする作品がそろいました。

答えはネットの中ではなく、人とつながり、実体験に向き合って、考えに考えぬいた自分の中にしかない。そんなことを気づかせてくれる作品集となっています。どうぞご一読ください。





# 文芸部門

【創作分野】

【随想分野】

【詩分野】

# 文芸部門分野別審査講評

## 【創作分野】

審査委員 尾崎 美紀

《審査総評》（一般の部と学齢児童生徒の部を含めて）

地球規模での温暖化で災害が多発し、戦争被害で世界中が疲弊し、先の見えない未来にただ怯える時代になってしまいました。子供たちに胸を張ってバトンタッチできるお手本を、大人は放棄してはいけません。こんな中でも、人は人とのつながりを求め、ささやかな温もりを感じたいと思うのです。応募作を読んで痛切に感じたのは、だれかを理解し心を許すことがどんなに難しいか、ということでした。ただし、ほんのわずかなきっかけでその糸口が見つかり、もつれていた糸がスルスルとほどけていくことは決して不可能ではないことも、伝えてくれます。窓を開けるのはあなた。新鮮な空気と緑あふれる景色が、閉じていた心をきつと開いてくれると、作品は訴えます。今回、一般の部はユニークな作品が多く、僅差で選考はとも迷いました。学童の部の応募が少なかったのはとても残念でした。

《最優秀賞》（一般の部と学齢児童生徒の部を併せた全作品より）

作品名「聞こえる色 感じる音」

主人公のかえではいわゆる色覚障害です。かえでの世界にはない色、いつも濁って見える色。そのために友人にも心を閉ざしてしまいますが、図工の教師との心のふれあいで、自分の色を見つけていく物語です。教師が手作りしていたカホンという民族楽器が魅力的に描かれており、色という視覚と、音という聴覚が一体化して、不思議な世界を作り出す作品でした。カホンから飛び出す音

の響きと弾むリズムが、閉じていたかえでの心を少しずつほぐしていく過程には心惹かれます。識別できない緑色のことを、「あなたにしか見つけれない特別な光」と表現した教師の豊かな心に思わずうなずいていました。表現力豊かな作品です。

〈優秀賞〉（一般の部作品より）

作品名「白ねこ人形劇団」

定年退職というだれもが経験する通過儀礼は、職も肩書もなくしてしまうことだと後ろ向きだった主人公が、地域のボランティアに参加することで新しい自分を見つけていく物語です。定年をゴールとするか、新しい出発点とするか、それによってそこから始まる長い年月の濃度が違ってきます。主人公たちは、グエンさんの提案で影絵の人形劇公演に向けて練習を始めます。全くの素人が、これまで経験したことのないことを、新しい仲間たちと始めようとすると姿が新鮮で、エールを送りくなりました。ハプニングがあったり、自信を無くしそうになったりしますが、どこまでも前向きな主人公たちに励まされました。出発点は、いつも「今」なのです。

〈優秀賞〉（学齢児童生徒の部作品より）

作品名「左耳」

小耳症しょうじしやうということを初めて知りました。知らない、ということが相手を傷つけることも。自分の耳のことですら思いをしてしまった主人公は、転校することによってくすぶっていた心を開け放すことができました。それでも、耳のことで自分を隠してしまう主人公に、友人は、主人公と同じ耳を持つローカルテレビの女性アナウンサーのことを教えてくれます。彼女は堂々と耳にピアスをして画面に現れ、「これは私のチャームポイント」と言います。少しだけ見方を変えることで、マイ

ナスだと思っていたことがプラスになり得ること。100人の無理解があっても、たった一人の理解者があることで、人は救われるのですね。その一人が輪を広げていけば、やがて差別という言葉がなくなるのだと感じました。

〈佳作〉（一般の部と学齡兒童生徒の部を併せた全作品より）

作品名「後会の柿すだれ」

愛する妻を亡くした主人公が、現実と幻の間をさまよいながら、彼女に導かれるように、生まれ故郷へフードワゴンを走らせます。行く先は主人公の故郷である四国ですが、鍵となるのが干し柿です。事情があつて、幼いころに母親と離れ離れになってしまった主人公の、年を経るにしたがつて募る母への思慕は、フードワゴンと共に故郷へ向かいます。冬の山里を橙色に染める干し柿「柿すだれ」を見て、名乗らぬままに母子が対面します。恐らく家業の「柿すだれ」を継ぐために家を出た母。五十年の時を経て手渡された干し柿を妻の仏前に供える主人公の、幻のような旅はようやく終ります。最初から最後まで、現在と過去がないまぜになつたような不思議な感覚の秀作でした。表現の重なりがなければと悔やまれます。

〈佳作〉

作品名「フランスの菊」

外来生物と聞けば、それは邪魔者、異物として排除されてしまします。確かに動物にしろ植物にしろ、在来種が外来種に排斥されて絶滅した生物もあります。フランス菊というおしゃれな名前と、真っ白で可憐なこの花も外来種です。愛らしい花を根こそぎ抜いてしまう生物多様性の保存を訴える人たちに、主人公はある種の疑問を持ちます。花に罪はない、抜き取られ廃棄される可憐な花を

見て、主人公の心は痛みます。自然保護運動を追求していくと、真つ向から対立する意見が出てきます。自然保護と生活、環境保全と改革。相反する主義の中で、疑問を持つ主人公の思いは、揺れ続けます。身近な問題であり、考えさせられる作品でした。

〈佳作〉

作品名「生まれてきてくれてありがとう」

高齢出産で妹を産んだ母親が亡くなったとき、作者は悲しみの中で「助産師さんになろう」と決心します。ただただ、表題の「生まれてきてくれてありがとう」を言うために。この言葉こそがすべてを表しています。短い作品ですが、生と死は背中合わせ。もしかしたら、生きていること自体が奇跡なのかもしれない今の時代に、この言葉はすべての人々に「生まれ、生きる」ことの意味を伝えています。

## 【随想分野】

審査委員 三浦 暁子

### 《審査総評》

本年度の応募総数は117編、そのうち、一般の部が10編、学齢の部が107編でした。人権という難しい問題をテーマに文章を書くのは、誰にとっても難しいことでしょう。しかし、私たちが生きていく上で考えなくてはならないのは確かです。

お寄せいただいた作品はそれぞれの観点から人権について思いをめぐらしていて、選考しながら、私にとって人権とは何かを考える良い機会となりました。自分の体験をもとに書かれた作品は、独自性に富み、説得力もあります。少々、文章が稚拙でも訴えかける力がある作品こそが人権作文にふさわしい。そう考えながら、興味深く読み進みました。実体験こそが人権作品を描くにあたって大切なことだと思います。

〈最優秀賞〉（一般の部と学齢児童生徒の部を併せた全作品より）

作品名「人権とはなんだろう」

「人権」という言葉にとまどいながらも、自分なりに理解しようとする姿勢に打たれました。考えるのを面倒がらずに努力し、表面的な理解にとどまることなく、自分自身の問題としてとらえるのは難しいことです。「人権について考える」と言葉で言うのは簡単ですが、実際に深く掘り下げるためには、頭も心もフル稼働させなくてはなりません。

しかし、作者はひたむきに、与えられた問題を自分の身に起こったこととして、答えを出そうとしています。もちろん、それは一朝一夕にできることはありませんが、少しずつ、誠実に人権問

題に向き合っていく。その態度に学ぶべき点は多くあります。

### 〈優秀賞〉（一般の部作品より）

作品名「家庭内の人権について ―家族の役割―」

母親は子供から口答えされると、自信をなくし、がつくりするものです。私は今までそう思ってきました。尊敬されようとは思いませんが、息子に「お母さん、それは違う」と言われると、半日くらいぐずぐず気に病んでしまいます。ところが作者は違います。「お母さん、それ違うで」とはっきり言える子供に育てたいという。なかなかできることはありません。

確かに、子供だからといって、親に従う必要はありません。違うと思ったときはそれをはっきり示す勇気を持たねばなりません。母親の方でもそれを受け止める度量が必要です。表現力豊かな作品でもあり、優秀賞にふさわしいと判断しました。

### 〈優秀賞〉（学齢児童生徒の部より）

作品名「優しい世界の創り方」

母が肺炎にかかり入院してしまったことによって、実に多くのことを学んだ作者の告白に感動しました。咳をしていた母に気づいていながら、深刻に考えなかった自分への後悔が正直に語られている点にも好感が持てます。そして、入院した母のお見舞いを通して、さらにたくさんのことを学んでいきます。

他人の苦しさを理解するのは簡単ではない。しかし、想像力を働かせることによって、思いやりの心を育てることができる。「優しい世界の創り方」というタイトルの付け方も優れており、私も一緒に考えなければと思いました。

〈佳作〉（一般の部と学齡児童生徒の部を併せた全作品より）

作品名「働く理由」

知らないうちに踏みにじられていく自分。そしてそれに気づいたときのショックが、誠実な文章で綴られています。真面目に働いていても、突如、解雇の憂き目にあうこともあります。しかし、仲間と話し合ううちに人間関係の大切さに気づくことができたことに救いを感じた作品でした。

〈佳作〉

作品名「老いてなお、想いは深く」

ある夏の日の出来事を優れた表現力で描き出しています。熱中症らしき人を助けようとしながら、自分の体の衰えに気づく様子が手に取るようにわかります。人を助けるためには自分自身に余裕がある必要があります。しかし、若い人の力を借りることによって解決する作者の人柄に、私もそうありたいと感じました。

〈佳作〉

作品名「車イス」

作者の姉は病気のため、バギーに乗らないと外出ができません。そのため、家族はバギーを押したり、荷物を持ったりと大変な思いをします。それだけではありません。周囲の視線にも耐えなければなりません。そうした経験をもとに、体の不自由な人とそれを支える家族が何に苦しんでいるのか、何をすべきなのかを具体的に示し、理解を求めている点が秀逸です。



## 【詩分野】

審査委員 時里 二郎

《審査総評》（一般の部と学齢児童生徒の部を含めて）

今年度は93点の詩作品の応募がありました。決して多いとは言えませんが、今年も力のこもった作品が集まりました。

「ヒューマンライツ」という大きなテーマがまず前提としてあるので、それが、詩の表現に制約を与えているということは否めません。しかし、人権についての思いや考えを訴え、それを社会に広げていくという趣旨と、詩の表現の制約とは決して矛盾するものではありません。今年度も、その二つの観点から作品を選びました。

全体の印象としては、やはり今年度も詩作品としては物足りない印象はぬぐえませんが、表現が常識的、常套的で、これまでに人権文化の表現として定着している内容をなぞっている作品が目立ちました。

しかし、人権文化の進展や人権課題の解決に向けて、社会にアピールしていく姿勢やその熱意は大いに感じられ、積極的に社会意識を変えようとする前向きな作品には恵まれたと思います。とりわけ、入選の詩作品のフリーズには、人権文化に対する社会への啓蒙的な活動に資するものが多くあり、それらは、広報活動を通して広く共感を呼ぶものと思われまます。

〈最優秀賞〉（一般の部と学齢児童生徒の部を併せた全作品より）

作品名「幸せなとき」

「あなたがいてくれる／それだけで今日も／私は幸せです」という最終連にあるとおり、生命や人権の尊さの原点とでもいふべき親子の愛情を、母親の立場から素直な言葉で、繊細に表現してい

るところにひかれます。例えば、第五連の、あかぎれにハンドクリームを塗ってあげるシーンなどが印象的です。

人権といい人の優しさといい、その原点は「何気ない日常の／ふとした瞬間に」現れる小さな気づきや思いなのだということを教えてくれます。

#### 〈優秀賞〉（一般の部より）

作品名「シャボン玉のように」

最近気になることは、SNSなどで目にする言葉の、配慮のなさ、思いやりのなさ。匿名性をよいことに、言葉が送り手であり、かつ受け手でもあるという性質を歪めていること。そして、何よりも、言葉が「心」をよりどころとして生まれていることが忘れられていること。

この作品は、やや繊細にすぎる心のトーンをベースにして作られているが、それだけ、今述べた、心と言葉が乖離した、粗雑でギスギスした昨今の言葉の環境への強い批判として受け取ることができます。

#### 〈優秀賞〉（学齢児童生徒の部より）

作品名「一人じゃない世界」

それぞれの連に、大切な人権意識の核になるフレーズが表現されていて、読んだ人の心に強く残る作品です。例えば「誰かの小さな優しさが／見えないところで／誰かの明日を支えてる」とか「私たちはみんな違う／けれど、その違いこそが／社会を彩る色になる」など、こころ豊かな社会への展望を印象深く訴えかけています。

〈佳作〉（一般の部と学齡児童生徒の部を併せた全作品より）

作品名「雲外蒼天」

心のこもった力強い言葉が印象的です。

「雲外蒼天」とは、第五連にもあるとおり、雲の上は青い空が広がっているという意味です。心が折れたり、生きる意味を見失った仲間に、自分という存在がひとりではないということ、生きていた先に、生き生きとした明るい未来が待っていると励ます。あまりにまっすぐで、正統的すぎ論の展開が気になりますが、迷いのない力のこもった思いが言葉によく伝わっており、学齡児童生徒の作品としてはとてもすぐれています。

〈佳作〉

作品名「こせいってすてきだね」

なにか心につまずきがあったのでしょうか。それが二組のクラスメートや担任の先生の支えによって学校生活が「ちよつとずつ楽しくなってきた」のです。

その気づきが、二組にはいろんな人がいる——という「こせい」の発見に繋がっていることがすばらしい。人の優しさや思いやりが、それぞれの友だちの個性によって生まれていること。そこからこころ豊かな社会の原点も見えてきます。

〈佳作〉

作品名「心の輪」

心の輪が、小さなひとりの声から始まること。しかも、小さな声に「よく耳をすませ」ることの

大切さをまず冒頭の第一連で述べていることがすばらしい。人の気持ちのこもった小さな心の「あたたかい光」に気づくことが、やがて人を大切に思う気持ちを育て、「未来を照らす光」の輪になっていく。

人権意識の原点がそこにあるような気がします。

《最優秀賞》

## 創作分野

聞こえる色 感じる音

高柳 美緒

信号の赤は、ちょっと怖い。

でも、今朝の「止まれ」はやさしかった。

知らないおばあさんが笑って、あいさつを返してくれたから。

今日はきつと、いいことある。

窓についた雨粒たちが、近くにある公園の石でできた広いすべり台を、友だちと手をつないですべったときみたいに、ゆっくりと、楽しそうに流れ落ちる。

本を開くと、窓の外空は灰色でも、物語

の空はキャンディのような青。

海はピアノの音みたいにきらめいて、夜空の星は、うれしい秘密みたいにまたたく。

それは、本当には「ない」世界。でも、かえでのまぶたの奥には、ちゃんと「ある」。

図書室のすみっこの席ですごす、どこにも行かずに、どこにでも行ける時間。

本のページをめくる音。紙のにおい。そして静寂。ここはかえでにとつて、だれにも邪魔

されない、大切な場所。

だけど、雨の日は違う。

しつとりとした、こもったにおい。窓ガラスをゆっくりとすべり落ちていく雨粒。その

光景は好きだ。

けれど、聞こえてくる音は、どうしても好きになれなかった。

たくさんひそひそ声。

それは、かえでにとつて、いくつもの色の絵の具がごちゃまぜになったような、濁った

音。

頭の中でぐるぐるとかき混ざり、耳の奥にへばりついて離れない。

…ああ、いやだな。

さっきまで胸の中で鮮やかに広がっていた色が、どんどん黒く塗りつぶされていく。

追いかけてくる黒を振り払うように、かえでは本の世界に没頭した。

チャイムが鳴り響く。

昼休みが終わり、ざわつく廊下の端っこのほうを歩きながら、かえではそっと、ため息をついた。

小学五年生になった。もう高学年だ。でも、かえではまだ、自分の心がどこにあるのか、うまく見つけられなかった。

他の人と同じように笑えない。同じように楽しめない。

ただひたすら、物語の世界に心を預けるだけだった。

かえでは、他の人が「みどり」と呼ぶ色を見分けるのが苦手だった。

生い茂った木々の葉も、誰かが「うぐいす色」と呼ぶ色も、かえでは土のような、くすんだ色に見えた。

心の中で、いつもその色をたどたどしく探す。指でなぞろうとしても、するりと逃げてしまうような、遠い色だった。

それでも、信号機の色はわかる。赤は熱くて痛い色。黄色は明るく弾ける色。青は冷たく静かな色。はつきりと、心の中に色を感じていた。

けれど、雨やくもりの日は少し違う。光がうまくとらえられなくて、ぼんやりと霞んで見える。信号の色も、なんだか心細くて、怖かった。

だから雨の日は、いつもまっすぐに家に帰ることになっていた。

放課後。校庭に並んでいる五月の桜。その枝々に芽吹いたばかりの薄い葉を、容赦なくたたく、雨の音が聞こえてくる。

靴箱まで行ったところで、忘れ物をしてい

ることに気がついたかえでは、三階の教室まで引き返した。

絵の具セット。昨日授業で使ったのに、洗わずに置いたままだった。今日こそ持って帰らないと。

個人のロッカーから絵の具セットを取った。その横に立ててある、分厚いスケッチブックのリングが目に入る。

手を伸ばし、つかんだところで、するりと指の力が抜けた。

たまらず、深い息が漏れ、肩が落ちる。

リングを指でぐっと奥へ押し返してから、かえではゆっくりと、教室を出た。

もう誰もいない廊下。階段を目指して歩き始めると、突き当たりにある図工室の方から、かすかに、なつかしいような、心地よい音が聞こえてきた。

トン、トトン、トン。

それは、雨粒が葉っぱをたたく音とはまた違う、やさしいリズム。

かえでは立ち止まった。

胸の奥の小さな鼓動が、音と共鳴するように、存在感を増す。かえでの心を少しだけ、外へ引つ張り出すように。

図工室のドアの、小さなガラス窓。好奇心に負けたかえでは、そっと背伸びをして、中をのぞきこんだ。

電気のついていない、広い室内。正面の椅子に前屈みになって座っている、初老の男の人の横顔。四月から図工の先生になった、大木先生。よく見ると、椅子だと思ったものは、椅子よりも少し小さめの、木でできた箱だった。

節くれ立った大きな手の甲が小さく上下し、箱の表面をトントンとやさしく叩く。

さつきから響いている、心地よい音の正体だった。

先生のまわりには、たくさんの木くずが、星のかけらのように散らばっている。動きの合間に見える指先は、木くずのせいかな、少し

白っぽく見えた。

かえではじっと、その音を聞いた。

一つ一つの音が、まるで小さな水滴のように澄んで、どこまでもやさしかった。

ふいに、顔を上げた先生と、目が合った。先生は少し驚いたように目を丸くし、そして、ふわりと微笑んだ。

見つかった。すぐに立ち去らなきやと思ったのに、かえでの上靴は床にぺたりとくっついてたまま、離れない。

動けずにいるうちに先生が近づいてきて、ゆっくりとドアを開けた。かすかな木の香りが、広がった気がした。図書室の古い紙のにおいとはまた違う、温かくて、どこかなつかしいような香り。

「ええと……赤だから、五年生か。小川かえでさん、ね」

しっかり名札を確認された。

「小川さん。よかったら中に入って、見ていって」

先生の言葉に、かえでの心臓がはねる。

図工室は、苦手だ。「かえでの絵は少し変わっている」と周りの人たちから言われ続けてきた。何度も、何度も。そのたびに、胸の奥がきゅうつと苦しくなって、耳をふさぎたくなった。

五年生になってからこれまで、図工の授業は三回あった。最初の二回は鉛筆を使ったクロッキーの授業で、なんとか無難にこなすことができた。

しかし、昨日の授業で初めて、絵の具を使い、赤、青、黄の三原色を混ぜてグラデーションをつくる課題が出た。かえでが塗った絵は、赤色から始まったグラデーションが、途中で黄色っぽくなり、最後には濁った黒茶色のようになってしまった。

かえでは怖くなって、授業の終わりにみんながばらばらに教室の前に作品を提出しに行く中、急いで画用紙を折り、スケッチブックの間に挟んで隠した。



誰にも気づかれなかったかな。先生が何か言ってきたらどうしよう。

まだ乾ききっていないかった絵の具は、混ざり合ってへばりついて、あのロッカーの中で、今も、きつと大変なことになってしまっている。

絵の具セットの持ち手を握るこぶしに、力が入る。もちろん、先生はそんなかえでのぐちやぐちやには気づくわけがない。

「どうぞ」

もう一度先生にそう促されてしまうと、断るほうが勇気のいるかえでは、そつと一步、足を踏み入れるしかない。

かえでと先生の他に誰もいない図工室の中は、授業中よりずっと、広く感じられた。色とりどりの絵の具、粘土の塊、使い古されたたくさん筆。それらがごちゃごちゃと置かれている。

でも、先生が立っている場所だけは、なんだか空気が澄んで見えた。先生の周りには、

いくつもの木材が散らばって、積み重なっている。

「これはね、打楽器で、カホンっていうんだ。叩くと、こんな音がする」

先生はそう言って、再びさっきの箱にまたがる。足を開いて、手の平で軽く、板の中央あたりを叩いた。

トン！

小気味いい音が響く。

「さっき形になったばかりだね。うれしくてつい、叩いていたんだ」

「先生が、作ったんですか？」

かえでは、やっと声が出せた。ふいに、辺りに積み重なり、散らばっている様々な大きさや形の木材たちの色が、木目の模様が、質感が、カホンと同じことに気づく。それらは、まだ形になっていない、物語の始まりのようだった。

先生の手が箱を叩くたびに、軽くてやわらかい音が響く。それはまるで、雨粒が楽しそ

うに跳ね回って、踊っているような音だった。  
「この学校の音楽室には、なかったからね。  
自分で作ってみようと思ったんだ」

先生はまた、やさしく微笑んだ。その笑顔は、雨上がりの空に、うつすらと虹がかかったようだった。

かえでの心に、じんわりと温かいものが広がる。その温かさは、本の世界とはまた違うもの。現実の世界に、少しだけ触れたような感覚。

かえでは、カホンの音を、もっと聞きたいと思った。

その瞳の変化に気がついたのか。先生はこちらを向いて、立ち上がる。

「叩いてみる？」

「え、……いいんですか？」

かえではためらいながらも、そう口にした。声が震えた。

「もちろん。荷物はここに置いていいから」

大きな作業台の天板をぼんぼんと叩く先生

に従い、ランドセルと絵の具セットを乗せる。  
「こっちが前。ひっくり返らないように、気をつけて座って」

先生が座っていたときは、小さいと感じたのに。自分が座るとなると、思ったより大きく感じる。

そつとまたがって、先生がしていたのと同じように、ひざの間から板をのぞかせた。

「そう。それで、板の真ん中あたりを叩いてみて」

かえでは、右手の平を板の真ん中まで、なでるように滑らせた。仕上げがまだなのか、表面は少しざらざらしている。

トン。

耳に届いた音から遅れて、叩いた手の平に、小さな振動が伝わる。

トン：トン、トン。

ぴりぴりぴりと、小さな電流が流れるみたいに、振動が手の平から腕を伝って駆け上がってくる。

「叩く場所を、ちよつと変えてみて。音が変わるから」

言われて、少し上の部分をたたいてみる。さつきより、硬い音になった。別の場所に移ると、また、違った響きになる。

「そう、そう。上手だね。好きなように、やってごらん」

続けて叩くと、弾むようなりズム。跳ねたり、転がったり。音は、かえでの心の中に、ぼつぼつと、小さな光を灯していくようだった。

おもしろい。楽しい。

かえでは、次々と生まれる新しい音との出会いを求めて、叩き続けた。

どれくらいそうしていたのか。あるいは、ほんの短い時間だったのか。

判断がつかなくなってしまう程度には、叩くことに夢中になってしまっていたみたいだった。

我に返ってしまつと、手が止まつた。

間髪入れず、先生が拍手する。

「すぐよくかつたよ！」

かえではそのままうつむいて、固まつてしまった。が、先生の次の一言で、すぐさま顔を上げることになる。

「小川さん、この板の部分に、色を塗ってみない？」

「え！？」

かえでは驚いて、先生の顔を見つめた。

「無理です。わたし、絵がすぐく、苦手なので……」

こんなすてきな音がするのに。私のせいで、音までぐじゃぐじゃになってしまったらと思うと、かえでは首を横に振るしかできない。

「これを叩く様子が、本当に楽しそうだったから。小川さんの心に、どんな色が広がっていたのか……ありのままでいいんだ。このカホンに、えがいてほしい」

先生の言葉に、かえでの胸の奥が、熱くな

る。

「でも…」

「好きな色を、一つだけでいいんだ。なんの色でもいい。小川さんが、今、一番心惹かれる色を」

かえでは、戸惑った。心惹かれる色。そんなもの、自分にあるのだろうか。いつも、心の中は、ごちゃまぜの濁った色ばかりだと思っていた。

先生は急かすことなく、ただ静かに、かえでが色を見つめるのを待っていた。

かえでの目が、赤、青、黄、白、黒…と、並んだ絵の具のチューブの上をさまよう。

そのうちの一つに、目が留まった。くすんだ色。それは、夕焼けの空のような、少し寂しそうな、でも力強い色。

かえでは、それを指さした。

「これ…」

「うん、いいね。じゃあ、これを筆にとって、自由に塗ってみよう」

先生は、小さな筆を差し出す。

かえでは、緊張で手が震えるのを感じながら、絵の具を筆に取った。

板の表面に、夕焼けの色が広がっていく。それは、かえでの心の中にある、ずっと言葉にできなかった感情のようだった。

「できました」

「きれいだね。まるで、若葉が光を浴びて、キラキラしているみたいだ」

かえでは、先生の言葉の意味がわからなかった。若葉？ 自分が塗ったのは、夕焼けのようなくすんだ色だ。先生は、何を言っているのだろうか。

「でも…」

かえでが言いかけようとする、先生は窓際にカホンを移動させた。そこは雨の日のぼんやりとした光が、一番よく当たる場所だった。

すると、どうだろう。窓から差し込む雨の光を浴びた木の板は、さっきまでくすんだ色

だったはずなのに、はつきりと、鮮やかできれいな色に変わっていた。

かえでは息をのんだ。信じられない気もちでいっぱいだった。

透き通るような、明るい色。きっと、先生が言った「若葉が光を浴びて、キラキラしている」色なんだろう。

「どうか、小川さん。これが、あなたの選んだ色だよ」

先生の言葉が、かえでの耳に心地よく響く。かえでは、自分がえがいたくすんだ色が、こんなにも美しい色だったことに、初めて気がついた。それは、雨の日の光の中で輝く、かえでだけの特別な色だった。

かえでの胸の奥が、また大きく、ドクン、と鳴った。

それは、図書室で本を読むときとは違う、もっと強く、温かい音。

奥歯をかみしめていないと、泣きだしそう  
だ。

「小川さん？」

かえでの小さな変化に、ちゃんと気づいてくれる。

この先生になら、話してもいいのかもしれない。

親にも、先生にも、友だちにも。今まで誰にも言えなかった、かえでの気もちを。

そう思った。

「うれしい、けど…悲しい、です」

「どうして？」

「私の中に、こんなに、きれいな色があるって、はじめて、知りました。それが、うれしくて…」

肩を震わせながら、ゆっくりと言葉をつむぐかえでを、先生は急かすことなく待つてくれている。

「でも。本当の色が、わからないことが、残念で…。きっと、他の人には、もっと、きれいな色に見えてるんだろうって。そう、思ったら…」

悲しいです。

最後まででは、言えなかった。

「…ああ、そうか。うん」

先生は、深く何度も、うなずいた。

「わかったよ。うん。小川さんの気もちは、ちゃんと伝わった」

ちゃんと伝わった…。

頭の中を反芻するその言葉に、かえでは、ほっとして体の力が抜けた。視界がじんわりとにじむ。

「まあまあ長く教師をしているから…。小川さんと『同じ』人を、ぼくは何人か知っている。検査とかは、したことないの？」

検査？

きょんとんとして固まっているかえでの姿に、先生は慌てた様子で手を振る。

「いや、違う。まず聞くのはこれじゃない。他に、このことを知っている人は？」

「いません。先生が、はじめてです」

「そうか…。きつと今まで、たくさんがん

ばってきたんだね」

大木先生は、やさしいまなざしで、かえで見つめる。

「どうしてわたしには、みどり色がわからないんでしょうか」

答えが返ってくるはずのない質問を、思わずぶつけてしまった。でも、先生は落ち着いた口調のまま応えてくれる。

「小川さん。あなたは緑色が見えないんじゃない。他の人とは違う色として、緑をとらえているだけなんだよ。それは、あなたにしか見つけられない、特別な光なんだ」

かえでの胸に、先生の言葉がじんわりと染み込んでいく。

今までずっと、自分はおかしいと思ってきた。みんなと同じように見て、感じる事ができない。欠陥があるのだと。

でも、先生はそうは言わなかった。「特別な光」だと。

先生は、作業台の傍まで戻ると、カホンを

置いた。

「さっきの音、もう一度聞かせてくれないかな」

かえでは、何も言わずにうなずいた。

トントン、トントン、ドクン、ドクン。

木の温かい音が、雨の日の図工室に満ちていく。

叩く場所や指の動かし方を変えながら、さまざまな音を奏でた。

やわらかい音、弾むような音、少しだけ乾いた音…。

その音は、かえでの心の中で、一つ一つの色になっていくようだった。

やわらかい音は、窓から見える桜の葉っぱに当たる雨の色。

弾むような音は、雨上がりに水たまりに映る空の色。

乾いた音は、濡れた校庭の土の色。

かえでは、はじめて、耳で色を感じた。

「このカホン、もう少ししたら完成なんだ。

仕上げるのを、小川さんにも手伝ってもらいたいな。あなたのその特別な感性で、カホンの音を、もっとすてきな色にしてほしい」

かえでは驚いて、先生の顔を見た。

「わたしに…できるでしょうか」

不安そうにつぶやくかえでに、先生は力強く言った。

「できるさ。だって、小川さんには、他の誰にも見えない、特別な色が見えているんだから」

かえでの心に、光が差し込んだようだった。雨の日の空に、うっすらと虹がかかったように。

帰り道。かえでは、ずっとその言葉を胸に抱いていた。

図書室の本の世界に逃げ込まなくても、この現実の世界にも、自分だけの特別な場所があるのかもしれない。

かえでは、自分の手の中に、まだ、ぬくもりが残っているような気がした。

それは、カホンを叩くたびに感じた、小さな振動。

そして、自分が塗った、特別な色の感触。

明日、先生に会ったら、スケッチブックを見せて、ちゃんと謝ろう。怒られるかもしれないけど、ちゃんと。

小さな勇気が、背中を押してくるのを感じる。

明日もまた、雨が降らないかな。







## 創作分野

白ねこ人形劇団

山口 豊

定年退職をして、念願の自由時間を手に入  
れて3カ月が経ちました。ただ、長年のサラ  
リーマン生活にどっぷりと浸かっていた俊太  
郎は少し退屈していました。

「どれ、ちよつと会社に行つて後輩たちを元  
氣づけてやろう。俺がいなくなつて困ってい  
ないかなあ」

「長い間、お疲れさまでした！」  
盛大な拍手の中、大きな花束を受け取つた  
辻俊太郎営業部長は定年退職の日を迎え、会  
社の玄関を出ようとしていました。

「ありがとうございます」

「部長、時々は会社に来て、我々に発破をか  
けてくださいよ」

「またいろいろとご指導くださいね」  
後輩たちは口々に感謝とねぎらいの言葉の  
シャワーを辻の頭上に振りかけたのでした。

\* \* \*

「そうだ。俺はもう外部の人間なんだ」  
受付で入構許可証を交付された俊太郎は懐  
かしい営業部に行きました。  
あちこちで鳴り続ける電話の応対に追われ  
る職員たち。

「もしもし、いつもお世話になっております。

ええ、その件につきましてはですね…」

「はい、そうでしたか。大変申し訳ありませんでした。では早速お送りいたします」

「これ、違うだろ！」

もちろん古巣ですから顔見知りの同僚や部下たちもいます。俊太郎はかつての部下だった北原を見つけたので声をかけました。

「北原、元気そうで何よりだな」

「ああ辻さん。すみません。今、手が離せないくて」

「ああ、すまん」

そこで今度はパソコンの画面を見ているかつては同じプロジェクトメンバーで苦勞を共にした中原を見つけて声をかけました。

「忙しそうだな。この経費はこの項目で入力したらいよいよ」

「あ、辻さん。今は違うんですよ。今日中に入力しなくちゃならないから、ゆっくり話もできなくてすみません。そこらでお茶でも飲

んでおいてください」

そこらといつてもどこにも空いた席がありません。俊太郎が座っていた席には見知らぬ誰かが営業部長と書かれたプレートの前に座っていました。俊太郎は『ああ、ここにはもう俺の居場所はない…』と思えたので、さっさと会社を出て街を歩いていきました。すると、向こうから見覚えのある人が歩いてきました。確か以前取引のあった会社の人です。俊太郎は笑顔で話しかけました。

「やあ、お久しぶりです。お元気ですか？」すると、その人は俊太郎の胸元をチラリと見て言いました。

「さて、どなたでしたかな。急ぎますので、失敬」

そう言う俊太郎には目もくれないで通り過ぎていきました。

「そうだ、今俺の胸元には会社のバッジがないんだった…」

俊太郎は寂しそうに笑うと、新入社員だっ

たころ、直属の上司だった谷本先輩が教えてくれた言葉を思い起こしていました。

「いいか、相手が頭を下げてくれているのはお前にはない。この会社のバッジに頭を下げているんだ。そのことを忘れて天狗になるなよ」

『そうだよな、今の俺には肩書も会社のバッジもない。何をたよりにして生きていけばいいんだろう…』

なんだかすっかりしよげてしまった俊太郎は一人昼下がりの公園のベンチに座っていました。折悪しく雨も降ってきました。

その時です。どこからか「ミュー、ミュー」とかすかに子猫の鳴く声がしました。俊太郎が声のする方を振り向いてみますと、一匹の薄汚れた子猫がお腹を空かせて鳴いていたのです。

俊太郎はなんだか他人事のようにには思えなくなり、思わず子猫を抱いて声をかけました。「お前も独りなのか？ 誰もお前のことを振

り向いてくれないのか？ そうか、よしよし、一緒に家に帰ろうな」

家に帰ると、妻の喜美子が驚いたように言いました。

「あらあら、どうしたの。すっかり濡れちゃって。まあ、どうしたの、その猫ちゃん。せつかくだから一緒にお風呂に入ったら？」

俊太郎は嫌がる子猫と風呂に入りました。

風呂から上がって綺麗になった子猫は真っ白な毛並みの猫でした。

「この子、どうするの？ 誰か探しているかもしれないわ」

「首輪もないし、お腹も空かしてたようだからきつと誰かが公園に捨てたんじゃないかな」

「あなたが世話をするというのなら家で飼ってもいいわよ」

「はっはっは。時間だけはたっぷりあるからね」

「よかったわね、猫ちゃん」

こうして白猫は辻家の一員となりました。

俊太郎はスマホの待受け画面に猫の写真を入  
れておくほど可愛がつていったのでした。

\* \* \*

ある日、町の広報を見ていた喜美子が言  
いました。

「あなた、町がボランティア活動の協力者を  
募集しているわ。時間があるのなら行ってみ  
たらどう？」

「君がそういうなら、とりあえず顔を出して  
みるよ」

指定された時間に役場に行ってみると、数  
人の人がすでに来ていました。

今回のボランティア活動の担当者は「西倉  
さん」という女性でした。

西倉さんが言いました。

「みなさん、今回のボランティア活動にお集  
まりいただき、ありがとうございます。今回  
はチームを編成して町の美化活動に取り組ん

でいこうと思います。それでは今からいくつ  
かのチームに分けますので、名前を呼ばれた  
方はそちらにお集まりください」

そう言つてきばきと彼女はチーム分けを  
行いました。俊太郎は五人で一つのチームに  
入ることになりました。

そのメンバーも多様性に富んでいました。

まずは、身体はがっしりとしていますが、  
日本語が少したどたどしく、それでいて黙々  
と活動するグエンさん、次にいつも物静かで  
ニコニコとしてついに後期高齢者になったと  
笑っている好々爺の山元さん、子どもの時の  
病気が原因で車いす生活になった川崎さん、  
あたしは学歴がないのよと笑いながら誰にで  
も話しかけていくおせっかい大好きな青野さ  
ん、そして俊太郎という五人が同じチームと  
なったのでした。

普段街を歩いているとあまり気づかなかっ  
たのですが、町には結構ゴミが落ちていまし  
た。街路樹の下、丁字路の植え込み、河原の

土手などを火ばさみとゴミ袋を持って、ゴミを見つけ次第袋に入れていくのですが、意外にも五人とも持っていたゴミ袋はすぐにいっぱいになりました。

「モッタイナイネ」と言いながらゲンさんがゴミを拾います。

「今は何でも使い捨てだからかのう」と変な所に感心しつつ山元さんもゴミを拾います。

「車いすだから高い所は届かないんで、その空き缶、お願いします」と言って指示を出してくれる川崎さん。

「町を汚して何とも思わないのかねえ。自分の家でもそこらにゴミを捨てるとは思えないのにねえ。それにね……」と話が延々と続く青野さん。

五人は初対面なのに、そう思えないほど親密さを増していきました。

もちろんただゴミだけを拾って歩いたわけではありません。点字ブロックの上に自転車止めてあったら、その自転車を脇にやつたり、

赤ちゃんを連れとお母さんを見かけたら、ベビーカーを階段の上まで運んでやつたりもしました。とにかく住みやすい街づくりをめざして、五人がそれぞれ自分にできることをフオーローし合いながら活動していきました。

\* \* \*

さて、こうした美化活動が何回か続いた後、五人のうちの誰からともなく美化活動もいいけど、他のボランティア活動もしたいよねという話になりました。

とはいえ、どんなものがあるのか想像もつきませんでしたので、西倉さんに相談してみようということになりました。

しばらくして西倉さんから図書館ボランティアで人形劇の依頼があるという返事がありました。

「人形劇かあ」

「人形や服の用意が大変かも」

「あまりお金はかけられないからなあ」

みんなが思案に暮れかけたとき、ポツンと

グエンさんが言いました。

「私、影絵の、人形劇見たことがあります」

「あつ、影絵ね。タイとかインドネシアで見かけるやつだね。あれだったら段ボール箱を切って色セロハンを貼ったら作れるね」

「いいねえ、それでやろう！」

それからは意見がどんどん出て来て具体化しはじめました。

「出し物は何にする？」

これもいろいろ意見が出ましたが、最終的には佐野洋子さんの作の『百万回生きた猫』をやろうということになりました。

「ところで、チームの名前は何にしようか？」

「チーム〇〇はどう？」

「子ども人形団はどうかな？」

「どれもいまいちだよなあ」

その時グエンさんが俊太郎の出しっぱなしにしていたスマホの画面を見て言いました。

「コン・メオ・チャン…」

「なにに、どうしたの？ あらあ、可愛い

白猫ちゃんね。辻さんとこの猫ちゃん？」

青野さんが目を細めながら大きな声で言いました。

「コン・メオ・チャンは、白い猫という意味です」

グエンさんが懐かしそうに言いました。

「おつ、いいのを思いましたぞ」と山元さんが言いました。

「何々、どんなの？」と川崎さん。

「名付けて『白ねこ人形劇団』ってのはどうだね」

「いいねえ、それ」

みんなが声を揃えて言いました。これが「白ねこ人形劇団」の誕生の瞬間でした。

登場する「王様役」は辻さん。「船乗役」はグエンさん。「女の子・おばあさん役」は青野さん。「主人公の猫」は経験豊富な山元さん、ナレーターは川崎さんということに決定し、辻家の白猫ちゃんも声を録音しておいて「白猫役」でデビューさせていただくことになり

ました。そしてその日から公演に向けて練習が始まりました。

「そこはもつと大きな声で言った方がいいと思うんだけど」

「少し早口過ぎないかな」

「そこもつと感情を込めて言おうよ」

ただでさえ人形を棒で操るだけでも大変なのに、台詞に対するダメ出しまでであるのですから大変なんものではありませんでした。五人とも試行錯誤を重ねていきました。

でも、みんな不慣れながらも、国籍、年齢、性別、障害のあるなしに関わらず、遠慮なく意見を出し合いながら、それこそ和氣藹々とした楽しい時間が過ぎていきました。

辻家では妻の喜美子が俊太郎に言いました。

「あなた、最近なんだか楽しそう。家でごろごろしていた時は元氣もなくて、このままじゃ病気になるいかしらと内心心配してたのよ。だから今のあなたを見ると、私ま

でうれしくなっちゃうわ。あなたも猫ちゃんも元氣になってほんとによかったわ」

俊太郎も『肩書も何もかも失って、自分なんか誰も必要としてくれなくなつたんだと思っていたあの頃に比べたら、あの四人に出会えて本当によかった』と素敵な出会いに心から感謝しつつカレンダーに公演予定日を赤い丸で囲んで心待ちにしていました。

家でも時間があると、自分の担当の王様の台詞をブツブツと一人で練習したり王様ならどんな風に思うのかな、どんな態度を取ってどんな言い方をするのかなと考えたりしていたのでした。

\* \* \*

ついに町の図書館での公演の日がやってきました。午前十時半に開演予定ですが、事前準備もあるので、午前九時に図書館前で待ち合わせていました。

グエンさんも川崎さんも緊張した面持ちでやってきました。いつもおしゃべりな青野さ

んでさえ、少し口数も少なくドキドキしているようです。みんな顔を見合わせて目で「頑張ろう」の意思表示を確認しました。

でも山元さんがまだ来ていません。

「どうしたんだろう。もう少しだけ待ってみようか」

しかし九時半になってもまだ来ていません。

携帯電話にかけても応答がありません。

ピリピリピリ……

青野さんの携帯電話が鳴りました。

「あら、西倉さんからだわ。もしもし、おはようございます。えっ！何ですって？ わかりました。ありがとうございます」

「西倉さんからなんて？」

みんなは青野さんが電話を切ると一斉に尋ねました。

「山元さんが今朝家で倒れて、救急車で病院へ運ばれて緊急入院になったらしいの。娘さんから西倉さんに電話があったそうで、それ

で西倉さんから私に今電話があったのよ」

みんなは一瞬声を失いました。今すぐにでも病院に駆け付けたい。でももうすぐ子どもたちが楽しみにしてくれている劇団初の公演がある。山元さんのためにも公演を成功させたい。みんなの思いは同じでした。

ただ、そのためには大きな問題が一つありました。

そうです。山元さんの代役を誰が務めるかという問題です。ましてや山元さんは主役の猫の役です。団員の中で残る男性はゲンさんと川崎さんと俊太郎です。

俊太郎は迷いました。うんと迷いました。

『王様役なら稽古したから完璧だ。でも主役の猫は山元さんの練習を聞いていたから台詞はわかるけど、感情までは自信ないなあ。もしも失敗したら、みんなに顔向けできないしなあ。でも知らんふりしてそれでいいのか、自分に恥ずかしくないのか』

もう開演時間がすぐそこに迫ってきていま



した。

俊太郎が決意を固めたように顔を上げたと  
き、グエンさんの目が、青野さんの目が、川  
崎さんの目が、『大丈夫だから』と俊太郎に語  
り掛けていました。

今は目の前の子どもたちの為に国籍も性別  
も障害の有無も何の障壁にもならないことを  
感じていました。

「よし、山元さんの分は私が引き受けます。  
みんなバックアップ頼みます」

「デノ・チョッ・トリー（任せなさい）」

「当然よお」

「もちろんです」

みんなの明るく元気な声が一斉に響きまし  
た。

俊太郎は自分を励ますように大きな声で言  
いました。

「よし、みなさん、出番です！」

スマホの中で白猫も微笑んでいるよう  
です。

幕の外からは待ちかねた子どもたちの楽し  
そうな声が聞こえています。

公演開始のブザーが鳴りました。  
いよいよ新たな幕が上がります。



《優秀賞・学齡児童生徒の部》

創作分野

左耳

瀬尾 寧来

私は、左耳が変だ。

リリリリ、リリリリ、

スマホから六時を知らせるアラームが鳴った。むくりと体を起こしてがっちり固まった体を伸ばす。前髪を右耳にかけ、メガネに手を伸ばした。窓から差し込んだ光の輪郭がはつきりと目に映る。よいしょと立ち上がって部屋を出た。一日が始まるうとしていた。

パシヤッ。

洗面台で腰を屈めて顔に水をかける。髪をまとめるのはせいぜいこの時ぐらいか。普段はずっと髪を下ろしている。正直、気が悪い。でも、隠さなくては。誰にもバレてはいけない。知られたらこの生活もまた終わってしまう。コンタクトを入れる時、ふと鏡の中の自分の顔を見た。そこには醜く曲がった左耳が付いていた。なんで、こんな耳が……。見ていて吐き気がしたのですぐに目を逸らした。

いつもの青いリボンがついた制服に着替えて階段をタタッと駆け降りました。下にはお母さんがご飯を作っている音がかすかに聞こえる。

「おはよう、お母さん」

扉を開けるとともにそういうと、お母さんもおはよう、と返してくれた。もうすでにテーブルには、湯気を立てている私の朝ご飯が並んでいた。

「いただきます」

席に着いて目玉焼きを口に運んだ。安定の美味しさだ。醤油と目玉焼きは相性バッチリ。

次にパンにジャムを塗って食べようとしていると、横に座っていたお父さんが急に新聞から目をはなし、真面目な顔をして何か言った。

「学校は〜い〜ぶか」

「うん？ 何て？」

「ああ、すまん。聞こえにくかったな、学校は大丈夫か？」

お父さんはさつきよりも一回り大きい声で言った。私は意味が分からなくて一瞬きょとんとしたがすぐに何のことだか理解する。耳のことか。

「大丈夫だよ、まだ、バレてない」

髪の毛に隠された見えない耳をじっとお父さんに見られている。見られてはいけないものを見られているという感覚に、居心地の悪さを覚えた。気持ち悪い、そう吐き捨てられ

た言葉が、嫌な記憶が、蘇ってくる。いつまで経っても忘れられない。鎖で縛られているみたいに。

「行ってきます」

嫌なものを振り払うようにしてさっさとご飯を食べ、家を足早に出た。

「おはよう、悠香！」

学校の席につくなり、前に座っていた莉子が声をかけてきた。莉子のポニーテールがざらりと揺れる。私は「うん、おはよう」と返事をした。それから読書時間が始まるまで他愛もない話を二人で続けた。

「昨日あった歌番組、悠香は見た？」

「うん、見たよ！」

「あのアイドルグループのダンスすごくなかった？」

「あつ、私も思った！」莉子の声ははっきりとガラスのように透き通っていて聞き取りやすい。前の学校ではこんな風におしゃべりす

ることが考えられなかった。この生活を壊したくないと強く願っている。キンコンカーンコンとチャイムがなって、日直が前に出た。

私は耳を隠さないといけないから、体育の時は特別措置として髪を括らなくてもいいということになっている。給食当番も免除してもらっている。この学校は居心地が良かった。

前の学校はこんなこと一つもなかった。許してくれなかったのだ。お父さんが「引越そう」と言ってくれた時は本当に嬉しくて、心から救われた気がした。いじめだって認めてくれない学校。早く潰れてしまえばいいのに。こう考えてしまう私は悪いのだろうか。

四時間目の授業は数学だった。私の一番得意な教科で好きな教科でもあった。クローラーの効いた涼しい部屋で、体育の後となれば寝

ている友達も何人か発見する。先生に見つかって寝起き顔で怒られている姿を見てふふつと莉子と顔を見合わせて笑ったものだ。本当に楽しいつ。

とうとうお待ちかねの給食の時間。メニューはなんだろう。ワクワクとした顔で合図を待つ。他の子たちもソワソワとしていた。壁にかかった白い大きな時計と睨めっこをする。もうすぐかなあ。まだかなあ。

「いいよー」

きたつ。みんなが一斉に教室を飛び出す。できるだけ多く盛り付けられているお皿を取ろうと必死だ。私もみんなにならって教室を出た。今日の給食は……。お汁を見た瞬間、顔が一気に青ざめた。息が止まる。あの時の映像がフラッシュバックした。苦しい。苦しい。

前の学校の給食の時、「お前の耳、気持ち悪い」

「化け物の耳じゃん」

「こっちくん」

そう言つて嗤われ、豚汁をぶっかけられたのだ。常日頃から、いろいろ悪口は言われていた。それは知つてゐる。でも、まさか、こんなことを。どうしていいか分からず突つ立つてゐると、先生が来てくれてホツとした。

「先生つ、佐伯君と笹原君にかけられつ、ましたっ」

すがるような気持ちで先生に話した。顔も涙でぐちゃぐちゃだったと思う。でも返つてきたのは、二人を怒る声でもなく、私を慰める言葉でもなく、

「自分でこぼしたんでしょ、すぐに人のせいにして。そんなことする子達じゃないでしょ」

という冷えきつた声音の予想にもしなかつた言葉だった。先生は何を見ていたの？　そこで私は心の中の何かが壊れた気がして、耐えられなくなり学校を飛び出して人目も気に

せず家にまっすぐ帰つた。急に帰つてきたびしょ濡れで泣き顔の私に何も言わず頭を撫でてくれたお母さんの体温は忘れていない。

いつまで経つてもこの記憶が私の心を蝕んでいた。

「悠香、どうかした？　取らないの？」

莉子の声で意識が現実に戻つてきた。

「ううん、大丈夫」

もう、あんなことは忘れよう。そうだ、忘れてしまえばもう苦しくなくなる。

「ただいま」

もう六時手前。すぐにご飯だろう。空は曇つていて綺麗なはずの夕焼けも見えない。

「おかえりー」という声が返つてきて、私は玄関に上がった。

ご飯の時はいつも、今日はどうだった、と家族で聞き合ふのが習慣だ。いいことも、悪いことも話す。色鮮やかなおかずがたくさん並んでいて、部屋は食欲をそそる匂いで満ち

ていた。

「学校どうだった？」

そうお母さんに聞かれて、今日あった面白かったこと、楽しかったことを話した。二人とも、うんうんと、私の学校生活をまるで自分のことのように嬉しそうに聞いてくれた。

次の日、

「今日の題材は…」

国語の授業が始まった。ふああ〜と大きなあくびが出る。昨日、遅くまで起きすぎた。窓からは陽光が差し込んでいて少し暑い。ふと外に目をやった。そこには反射した私がうつすらと写りこんでいた。よし、問題ない。ちゃんと耳は隠れていた。

「この言葉の意味、分かるか」

『はい！』

「じゃあ、乙木」

「えっと、夕日の光のことです」昨日予習していたところだ。

「正解。みんなも理解しておくように」

拍手がちらほら聞こえてきた。私を称賛してくれる友達がいるのが、認めてくれるのが何より嬉しかった。

お昼休みにさしかかった頃、莉子とおしゃべりしながら図書室に向かっていた。

「その本どうだった？」

「感動した〜！ 悠香にもおすすめ」

「本当？ 借りてみようかな」

話しながら廊下の角を曲がる時、どんっ。

誰かとぶつかった。

「大丈夫？」

慌てて立ち上がり、手を出すと相手の子もすみませんと言って立ち上がり去っていった。一年生の子かな。

「いったー」

腰をさすった。莉子も声をかけてくれたが…。

「大丈夫……？ その耳どうした、の」

ドクン。

心臓が大きく波打った。徐々に鼓動のスピードが早くなる。はあ、はあ。呼吸も荒くなる。知らず知らずのうちに左耳へと手が伸びていた。なんで。もしかして、今ぶつかった時に見えた？ どうしよう。どうしよう。過去の映像が頭をよぎる。怖い。そんな感情で支配された。頭が真っ白になって言葉がまとまらない。景色がスローモーションで流れていく。

「あつ、その、耳」

「耳、大丈夫なの？」

言葉が詰まってつぎはぎだらけになる。どうすることもできなくなって、その場を逃げ出した。ちよつと待ってという言葉も振り切つて。

保健室の前でせえはあ、と息をする。呼吸を整えてから、トントンとノックをした。もうこの学校にはいられない。莉子に会えな

い。

「先生、しんどいです。帰らせてください」

家に帰らせてもらつてから、私はベッドに寝転んだ。お母さんは私を家に送った後、大切な仕事だけ終わらせてくると言つて、慌てて出ていった。外は夕立の雨粒が大きな音を立てていた。ぐるぐると感情が渦巻く。終わった。どうしよう。怖い。怖い。どう言い繕えば。嗤われる？ 嫌われる？ いじめられる？ 何も分からなくなった。落ち着いてくると、じわつと涙が滲んできて視界を奪っていく。電気をつけていない薄暗い部屋の布団の中で静かに泣いた。莉子にバレってしまった。もう友達には戻れないのかな。言いふらされてしまうのかな。もう一生会えないのかな。

何時間も泣いて泣いて涙が枯れた時、

ピンポーン

インターホンが音を發した。いやいや布団

から出て、画面を見にいくと、そこには制服姿の莉子がいた。

なんで。

思考が停止した。

喰いにきた？ そう疑わずにはいられない。

体が震える。怖いと訴える。突然、そこから声が流れてきた。

「ねえ、悠香。そこにいるの」

私は息を止めた。何かを言われる覚悟はできている。逃げ腰で身構えたその時。

「悠香の耳、『小耳症』<sup>しょうじしやう</sup>って言われるやつでしょ」

想像とは全く別の言葉が返ってきた。というか、なんでそれを知って…。

「悠香、もしかして、バカにされることを恐れてる？ 普段から突然、何かに怖がっているような顔をしてるよね？ 前にいた学校で何かあったの？」

全てを莉子に見透かされている。莉子はこ

ういう時に勘が鋭い。でも、画面越しから伝わる視線は、何かを喰う目ではなくて。

「私は、バカにしないよ、これだけは信じて」

美しい瞳をしていた。なんで。一筋の涙が頬を伝った。これは嘘じゃない。そう信じられる声音だった。莉子は私を心配して。

私は、いつの間にか玄関に向かって走っていた。ガチャッと扉を開けるとそこには、顔がほてった莉子の姿があった。部活帰りだろうか。莉子がニコツと微笑む。

「悠香」

「莉子っ」

莉子の顔を見て涙がまた溢れてきた。今度は悲しい涙じゃない。嬉しくて、安心して流れた涙だ。莉子が抱きついて背中をさすってくれた。人の体温が心地いい。親友を疑った私がバカだった。こんな莉子が誰かをバカにするわけない。この四ヶ月間私は莉子の何を見てきたのか。



私の涙が落ち着くと、莉子が話を切り出した。

「前の学校で何があったの」

言うことを一瞬ためらったが私は言った。

「この耳でいじめられていた」

この過去を今の友達に話すのは初めてだった。なんだか緊張する。でも莉子なら受け入れてくれる。そう感じた。

「そうなんだ……。教えてくれてありがとう」

感謝を言うのはこっちの方なのに。受け入れてくれてありがとう。

「ねえ、莉子。なんで小耳症ってわかったの」

私が一番気になっているところだ。

「それはね、悠香がどっか行っちゃった後、改めて考えたの。あの耳はなんだったんだろうって。そうしたら、とある人と同じ耳だったって気づいたの」

私と同じ耳を持った人がいたのか。驚いた。

「この動画、見てくれない?」

莉子が差し出してきたスマホには、ステージの上に立った一人の若い女性が映っていた。

ショートカットの隙間からは私と同じ耳が見えていた。彼女のピアスが照明を反射してきらりと光る。動画が再生された。その動画は女性の耳についての三分余りの短いスピーチ動画だった。しかし、そのスピーチには、彼女の耳と共に歩いた人生がギュッと詰まっていた。

「私は恵まれていた。この耳も隠さずに生きられているのも、誰もこの耳を否定しなかったから。気を遣ってくれたから。みんなのおかげで私はこの耳を愛せている。私だけのチャームポイントだ。みんなにありがとうと伝えたい」

と。そんな内容だった。私とは全く違った。私はこの耳が嫌いだった。そして隠し続けた。この女性は堂々とはっきりと伝えていた。こんな生き方もあったのか。こうやって

認めてくれる人もいたのか。何もかも衝撃的だった。

ポロリと私の口から言葉が溢れた。

「私もこんなふうに生きられるかなあ」

「できるよ、絶対に。私も手伝うから！」

「っ、ありがとう」

そんな眩きでも莉子は肯定してくれた。

それから、この女性について、莉子からいろいろ聞いた。名前を近藤紬というらしい。莉子のおばあちゃんの住んでいる地域のローカルテレビのアナウンサーさんで、耳についてのスピーチもそこでは有名らしい。それで莉子も知っていたようだ。

「私ね、紬さんのこと尊敬しているんだ」

キラキラとした目で語る莉子の横顔を見て、莉子と親友になれて本当によかったと心から思った。

「じゃあね」

「うん、ありがとう。バイバイ」

莉子が帰ってすぐに熱も冷めやまぬ中、勢いで美容院を予約した。そのまま、お母さんの帰りを玄関で待つてソワソワしていた。早く伝えたい！

莉子が帰ってから数十分後、お母さんの足音が聞こえてきた。

「ただいま、あれ、お出迎え？どうしたの。体調は大丈夫？」

「あのね、お母さん」

莉子とあったこと全部話した。お母さんは聞きながら涙を流してくれた。よかったねえ、よかったねえと。お父さんが帰ってくるなり、お母さんも玄関に向かって報告していた。お父さんも嬉し泣きをして、なんのお祝いかわからないけど、お寿司屋さんに連れていってもらうことになった。その後、家族全員で、紬さんのスピーチを聞いてファンになったのはまた、別の話。

次の日は莉子が、休んでいいよ、根回しし

とくからとグッドマークとともにラインで送ってくれたから、休んで美容院に行くことにした。

「この髪型でお願いします」

ふう、はあ。

深呼吸して家を出る。まだ少し心配だったけど。きつと大丈夫。莉子もついている。お母さんとお父さんも頑張れ、と送り出してくれた。

校門前、

「おはようっ」

莉子が後ろから飛びついてきた。

「おはよう」

「すごい似合ってるよ」

「っ、ありがとう」

そう、私は長かった髪をバツサリ切り落としてショートカットにしたのだ。髪が風に揺れる。朝の爽やかな風が私の変わる第一歩を

応援してくれているようだ。

莉子と一緒に教室に入った。みんなが一斉にこちらを見る。

「おはようっ」

『おはよう』

いつも通り挨拶してくれた。反応はそれぞれあった。髪似合ってるね、とか耳ちっちゃくて可愛いとかもあった。みんな、肯定的だった。こんな日が来るなんて思いもしなかった。ありがたさを噛み締めて、莉子にグッドマークを送る。莉子も満面の笑みで返してくれた。

朝の読書の時間、担任の先生に呼ばれた。何事かと思えば、耳のことだった。

「昨日ね、大川さんが道徳の時間くださいって言ってきてあなたの耳について話してくれたのよ。みんなも受け入れてくれている。よかったわね」

事情を知っている先生も嬉しそうに笑ってくれた。そんなことがあったとは知らなかった。莉子には助けてもらってばかりだな。感謝してもしきれない。

「先生に呼ばれてたけどなんだったの？」

「秘密！ でも莉子に出会えてよかった」

「何それー！ 私もだよ」

そうこうしているうちに朝のホームルームが始まった。

あとがき

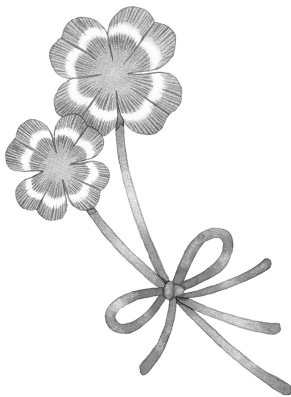
私も小耳症を持っていますが、今までの悠香みたいな生活や考え方ではなく、紬さんのような人生を送っていて、莉子のように耳のことを理解してくれる友達もたくさんいます。

この物語は、私の生き方とは違う、同じ病気を持った子のことを想像してみたかったのと、人と違ってそれもそれは個性になるし、理解してくれる人はきつという。という事を伝え

たかったからです。

私は今、幸せです。周りに恵まれていました。でも、周りの人が違ったら、悠香のようになっただけかもしれない。だからこそ、とてもみんなには感謝しています。悠香にもこんな人がもともと増えて幸せになって欲しいです。

私の物語を読んでくれてありがとうございます。



《最優秀賞》

## 随想分野

人権とはなんだろう

桃井 唯月

私は、初めて人権という言葉聞いたとき、少し難しいと感じました。でも「みんなが大切にされて、安心して暮らせるようにすること」と考えると、少し身近に思えるようになりました。学校や家で過ごす中で、人権について考えるきっかけがいくつかありました。

ある日、友達と話していたとき、私が自分の意見を言おうとしたのに、「それはちがうんじゃない」と強い口調で言われてしまったことがあります。私は少ししょんぼりしてしまい、それ以上話せなくなっていました。

そのとき、「自分の考えを言うことも人権のひとつなんじゃないか」と感じました。安心して意見を出し合えることが大切なのに、相手をおさえつけるような言い方をしてしまうと、その人の気持ちをきずつけてしまうのだと気づきました。

また、私自身も、からかわれていやな思いをしたことがあります。たいしたことないと思っている言葉でも、言われた人にとっては深く心に残ることがあります。そのとき、私は「自分が言われたらいやなことは、人にも言わないようにしよう」と思いました。言葉には、人を笑顔にする力もあれば、きずつけてしまう力もあるのだと実感しました。

私の家では、おじいちゃんがよく「思いやりが大事だよ」と言います。人権を守ることには、むずかしいことをするのではなく、まずは身近な人を思いやることから始まるのだと思います。あいさつをする、困っている人がいたら声をかける、意見を最後まで聞く。そ

んな小さなことが積み重なれば、誰もが安心して生活できるのではないでしょうか。

世界には、戦や貧しさのために学校へ行けない子どもたちや、安全な場所で暮らせない人たちがいます。ニュースでそういう映像を見ると、私は胸がぎゅつとします。私たちにできることは小さいかもしれませんが、「自分だけよければいい」という考えをやめて、相手の立場を想像することが、人権を守る第一歩だと思います。

これから中学生になり、もっと多くの人と出会うようになります。そのとき、ちがう意見や考え方にふれることも増えるはずですが、でも、相手を大切に思う気持ちを忘れずにいたいです。相手をおさえつけたり、見下したりするのではなくちがいを認め合える人になりたいです。

私にとって人権とは、「みんなが安心して自分らしくいられること」です。そのために、まずは自分の言葉や行動に気をつけ、思いや

りの気持ちを持ち続けたいと思います。そして、これから出会うたくさんの人と、笑顔でつながっていけるように努力していきたいです。



《優秀賞・一般の部》

随想分野

家庭内の人権について ― 家族の役割 ―

大城戸 聡子

子供が生まれ、私には子育てで一つの夢がありました。その子が成長し、自分の意見をもつ年頃になった時、

「お母さん、それ違うで」

と、はつきり言える子供に育てたいという夢です。

子供にとって、親は人間の見本であり、人としてあるべき姿を示す一番身近な存在です。ゆえに、その子をもつ価値観の多くは、その親から伝授されるといっても過言ではないでしょう。

その上で、社会的な生き物である我々人間は、園や学校、職場等で年齢を重ねていくなかで様々な人々と接していきます。先生や友達、先輩や後輩、上司や同僚といった生まれも育ちも違う人々と出会い、もまれていくことで、新たな気づきや葛藤を抱えていきます。そして、その子自身が選択した価値観を作り、それを育てていくことでしょう。

さて、成長し親の手もさほどかからなくなった彼らが、実家でその親に対して、NOや違いますという否定を表明することは、容易なことではありません。なぜなら親は、彼らの価値観の源であり、それに対して異を唱えるということは、ある意味自意識を根底から、それも自らの手で覆すことになるからです。

更に、育ててもらい、今も何らかの支えになっっている存在に対しての裏切りとまではいかなくても、恩を仇で返すような気分になってしまうことは、想像に難くありません。

それでも、

「お母さん、それ違うで」

と言える勇気と、その根拠を説明できる成長こそが、自立の大きな一歩だととらえ、否定された事実に拘ることなく、子供の成長を喜ぶことが、本来親としてあるべき姿ではないでしょうか。

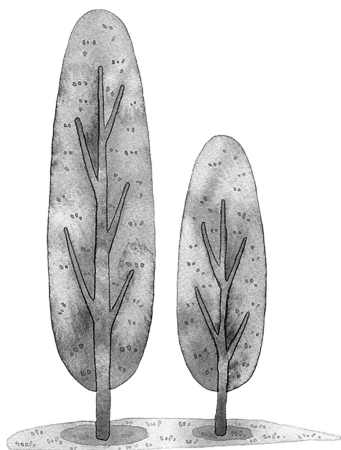
また、家庭内で自分の意見が言える環境にあることが、家族の人権が守られていることであると共に、家が心理的安全が確保されている場所になっている証明となります。

生きていることは、常に社会情勢に対応していくための変化を求められ続けます。それは、人生の先輩である親であっても同じです。長い時間をかけて築き上げた価値観の中には、どんな時代になろうと変わらぬものもあれば、実は変えていった方が良いものも混在しています。その部分を家族で確認し合い、誰かに負担や悲しみ、苦しみをかけることがなきよう、認識を変化させていくことこそが、

社会変革の第一歩になるのではと考えます。

家族の役割は、ずっと同じではありません。子供の成長と共に、逆に親の方が教えられることも増えるかも知れません。そう「老いては子に従え」の諺のように、もちつもたれつ按配の良い関係を築いていく。それは、その時は小さくても新しい世界へ変える、変わるステップだろうと、毎度子供にこう言われる度に、私は再認識しています。

「お母さん、それ違うで」





《優秀賞・学齡児童生徒の部》

随想分野

優しい世界の創り方

原田 正樹

今年の一月、僕の母が咳をし始めた。風邪かな？ 僕は大きくもめなかった。その頃の僕は中学受験で頭がいっぱいだった。自分のことで精一杯だった。気がつけば母の症状はどんどん悪化し、一日中咳をしていた。とても辛そうで、身体中が痛いと言っていた。結果、母は肺炎だった。たちの悪い肺炎で、入院が必要だった。僕はそこで初めて母の苦しさを知った。自分のことばかり考えていた自身を恥じた。

入院中の母のお見舞いに行くと、たくさん

の患者さんがいた。母の病室に行こうと歩いていると、前をゆつくりと歩くおばさんがいた。正直、邪魔だな、速く歩いてよとイライラした。そんな事とは気がつかずに、おばさんはさらにゆつくりと歩く。僕はますますイライラした。しかし、おばさんをじっと見てみると、大きなキャリーバッグのような物を引きずっていた。よくよく見てみると、酸素ボンベだった。僕の身体に稲妻が走った。と同時に、おばさんに謝りたい気持ちでいっぱいになった。おばさんはとても息苦しそうに、とてもつらそうによちよちとだけど、一生懸命に一步一步進んでいたのだ。僕は勇気をもって

「何かお手伝いできることはありませんか」と声をかけたかったけれど、どうしても勇気が出なかった。もどかしかった。

母の病室で、おばさんのことを話した。母は黙って話を聞いてくれた。母は言った。

「病院にはいろんな病氣の人がいる。おばさ

んは酸素ボンベを持っていたから、病気だと気づくことが出来たよね？ でも見た目だけで病気だとわからない人もいる。だからみんなに思いやりを持って、優しい気持ちで人に接して欲しいな」

僕はこのことを帰宅してからもずっと考えていた。僕は普段、なかなか病気や怪我の人と接することがない。しかし、クラスメイトが怪我をしたら心配だ。助けてあげたいと思う。

街を歩いているといろんな人がいる。速く歩く人、ゆっくり歩く人。僕は今までゆっくり歩く人は邪魔だと思っていた。しかし、ゆっくり歩く人には理由があるのかもしれない。おじいちゃん、おばあちゃんはゆっくり歩く人が多い。もしかしたら、身体が痛いのかもかもしれない。若い人だって足に怪我をしているのかもしれない。「何かお手伝いしましょうか」と声をかけることは難しい。でも、皆が優しい気持ちで見守れるようになれば、

きつと言葉も自然に出てくるだろう。

過去の自分を振り返ると、僕には想像力が欠けていたとを感じる。母のことだってそうだ。母のしんどさを想像することが出来なかった。皆、個人個人の理由がある。想像力すなわち思いやる心を持ってこれから生きていきたい。

それが僕なりの優しい世界の創り方だ。



《最優秀賞》

詩  
分野

幸せなとき

蔭谷 千春

季節は巡り気もそぞろな春  
学校から急いで帰って来て  
新しいクラスの顔ぶれを  
息を切らしながら  
一生懸命教えてくれる  
あなたの愛らしい声を聞いたとき

夏場のやりきれない暑い夜  
遅くから手つけた宿題に  
追われて  
壁に掛かった時計の針を

何度も確かめながら

鉛筆を走らせる

あなたの困った顔を見たとき

秋の兆しを感じる

休日の肌寒い朝

二度寝をしようと

私の布団の中に

潜り込んできた

あなたの柔らかい寝癖の髪が

私の頬に触れたとき

寒がりのあなたが嫌いな冬

細い指の小さなあかざれが

痛々しかったから

せめてあなたの

好きな香りのハンドクリームを

塗ってあげたくて

そつと指で伸ばすと

ほのかな桃が香ったとき

何気ない日常の  
ふとした瞬間に  
あなたの存在を愛おしく思う  
すぐそばに  
あなたが居てくれる  
それだけで今日も  
私は幸せです





真綿のように  
柔らかいかも知れない  
絹糸のように  
繊細かも知れない  
鋼のように  
頑丈かも知れない  
でも  
心は目に見えない  
よりていねいに  
ことばを選び

発しなければ  
より心して  
ことばを練り  
綴らなければ  
一言一言が  
あなたにとって  
どれほど強く  
心に響くのか  
どんな意味を  
もつのか  
考えることを  
忘れない  
心は一瞬にして  
シャボン玉のように  
こわれてしまうかも  
知れないから

《優秀賞・学齡児童生徒の部》

詩 分野

一人じゃない世界

石本 芽依沙

誰かの小さな優しさが  
見えないところで

誰かの明日を支えてる

「大丈夫？」の一言で

心の重さが軽くなることがある

たった一枚の手紙で

涙が笑顔に変わることもある

私たちはみんな違う

けれど、その違いこそが

社会を彩る色になる

未来はまだ遠くて

不安に揺れることもあるけれど

信じたい

思いやりの心が繋がって

誰も取り残さない社会を

きつと私たちが創れることを



動  
画  
部  
門

イ  
ラ  
ス  
ト  
部  
門

## 動画・イラスト部門別審査講評

### 【動画部門】

審査委員 山本 剛大・篠原 嘉一

#### 《審査総評》

今回のコンテストには、いじめや人種差別、障害、多様性、思いやりなど、幅広いテーマを取り上げた91の動画作品の応募がありました。身近に起きた出来事を題材にしたり、日頃から気になっている問題に向き合ったりして、思いを映像にのせた力作が目を引きました。制作にあたった皆さんがどんな議論をして、ロケをして、編集を進めたのか、その様子を想像しながら興味深く拝見しました。

審査にあたっては、メッセージがいかに伝わってくるかを重視しました。限られた条件の中で「伝わる映像」をまとめるのはとても難しい作業です。それだけに、まずは何に注目するか、問題の在りかをどこに見いだすか、誰に何を訴えかけるかをしっかり見定めることが重要です。その上で、短い動画であっても構成を練る、コメントをひと言ずつ吟味する、映像や音声を工夫する、繰り返し試写をして改善する……そんな丁寧な作業が作品の質を高めると思います。

見た人が身近な「自分ごと」として捉え、共感できる動画作品は、メッセージを伝える力が絶大です。見た人の心を動かすことができれば、大きな輪が広がるはずです。誰しもの尊厳と人格が尊重され、自分らしく生きられる社会をめざす皆さんの思いが届くよう、映像表現の技術もさらに高めていただければと願っています。



## 【イラスト部門】

審査委員 古巻 和芳

### 《審査総評》

人権問題について考え、啓発するためのイラストを構想することの難しさを改めて感じました。人権感覚とは、言い換えれば応募要領にあるように「優しさ」、「思いやり」、「支え合い」、また「一人一人を大切にすること」となると思われませんが、絵という媒体の特性上、それらを見た瞬間に理解できるよう構成しなければならぬため、どうしても既視感のあるものとなってしまいがちです。そのような中で「優しさで明るく」は、空に舞い上がっていくランタンの明かりを「優しさ」の象徴として描く着想が素晴らしかったです。また、その様子を手をつないで見守る人たちの姿もみんなで心一つにして大切なものは何かを確認し合っているようで、私たちがめざす社会像をイメージさせると感じました。イラストや絵画は、技術もさることながら、やはり「何をどのように描くか」ということが一番の課題です。次回以降も、このような自由でとらわれない発想でテーマに取り組まれることを応募者には期待します。

# 動 画 部 門

## 最優秀賞



↑ 最優秀賞、優秀賞作品はコチラからご覧になれます。

### 「Hurt Hearts」 チームC (県立伊丹北高等学校)

講評：ふとした言葉が人を傷つけてしまうという、日常生活で起こりがちな課題に注目した作品です。主人公が少し繊細すぎるかも…とも感じましたが、相手の気持ちに寄り添う想像力の大切さに改めて気付かされました。ハート型の紙を塗りつぶす光景は、何気ない言葉が心を傷つけ、やがて壊してしまう過程を表現しています。声のエコーや効果音、机をたたく場面なども工夫が感じられます。回想シーンでは映像のオーバーラップをそれぞれ一旦抜き、また、最後に「○○しませんか」といったメッセージを文字だけで加える演出があってもよかったと感じましたが、思いがストレートに伝わってくる力作でした。

## 優秀賞



### 「わかってください」 神戸星城高校放送部 (神戸星城高等学校)

講評：吃音についてより多くの人が正しく理解し、当事者の立場に立って接してもらいたいというまっすぐなメッセージが伝わりました。ピアノの音や、逆光のワンショットで場面を転換する工夫も効果的で、構成もよく練られていると感じます。最後の場面は男子生徒の1ショット・フリーズではなく、声をかけてくれた女子生徒とのコミュニケーションを描く、やや広い映像でもいいと感じました。また、テーマが限定的になりがちで、最後の場面でもう少し普遍的なメッセージを投げかければよかったと思いました。見終わったときに優しい思いやりが感じられる、すがすがしい作品に仕上がっています。

# イラスト部門

## 最優秀賞



「優しさで明るく」

柴田 結衣

(明石市立野々池中学校)

講評：空に舞い上がっていくランタンの明かりを優しさの象徴として描く着想が素晴らしい。また、その様子を手をつないで見守る人たちの姿も、みんなで心をつにして大切なものは何かを確認し合っているようで、私たちがめざす社会像をイメージさせます。

## 優秀賞



「みらいを描く」

福永 柚樂

(クラーク記念国際高等学校  
三田キャンパス)

講評：画中の人物が、本コンテスト応募作のような絵を描いているというメタ構造がユニークであり、絵としての完成度も高い。ただ、人物の右手が筆を握っているように見えないのが惜しい。

令和7年度

『HYOGOヒューマンライツ  
作品コンテスト』

発行  
編集

令和7年12月

公益財団法人兵庫県人権啓発協会

〒650-0003

神戸市中央区山本通4丁目22番15号

兵庫県立のじぎく会館内

TEL 078 (242) 5355

FAX 078 (242) 5360

発行者

兵庫県

印刷

公益財団法人兵庫県人権啓発協会  
(株)服部プロセス

